蕪邦句集

蕪翁句集巻之上

几董著

春之部

うぐらの乃ひかりたのもむ光の春
日の心とものの解乃のらよの春
三條の雑煮ゆゆしき長者かな

雛祭

くしひるのあちこちとするひふうち
夢乃声ちかき日も暮らうり
つくしとの廣乃海ち動き有春

蛍を捉へてとしをもしる

西鶴賛

うらぶれて冷るもうれし軒の梅

蛍の夕ぬけがをしろに成る青柳

うぐいすや内裏をおして鮫ぬすむ

曽我や茨ぐるまして高うしたり

うぐいすや入婦のちいさきにゆるして

禁城春色暁蒼々

青柳やふか大夫乃叶うまう

春ふかう根をとられる柳哉

梅もうてさひしくあしたものぶり

桃やうて柳とし名るあの心

ちる柳やかけ生の里のせうの中

やるかたをうらうらとうつる柳哉

草庵

こもれ梅うぐいす迷をもてなす

うめ折て鶯手うちたたいたる

白梅や墨よりしたる鴻鸞哉

[illegible]垣の外
[illegible]の場もあり梅のもと
[illegible]
宿の梅おれたるなのつゆ
[illegible]て重箱もたせ
[illegible]
をいまめのつゆ
乃[illegible]
隈[illegible]あるさまやうゆゑ

[illegible]梅や茶屋[illegible]
[illegible]鍋[illegible]
梅[illegible]て常[illegible]
原[illegible]て梅の[illegible]
[illegible]
あ[illegible]の[illegible]
[illegible]儀[illegible]
梅[illegible]
[illegible]梅の[illegible]

小夜衣ゆかの梅の匂ひかな
梅ぞ色　南ぞ香　かすかなる

早春

ふたたび京をこゆる春の海
比叡の峯に雲やなの氷ゆる
ゆふべの夢やかすの春ちり
春ちかし月ちかしのあけぼの
ゆめうつつ宵寝をいとひ草
鶯文入れ給ふ春の人

丁酉九月中山寺乃男うら

人日

ぜんそくや神の面の片ぬぎ
おれさりて径をうり行の中
古ちかやあるうく捨るとれ中
九董と口ずさむ春
あるらしし

筆まんまるの春の春
月白や僧乃ゆめ雪の雲

春月や金堂の床同じ家

春夜聞琴

蒲團の名ごりやおもかげ

お対して馬帽をみせの宿

公遠く孤化こゝの音の長

ちゝこの侍奉千金の

音をしみ我家の方へ

むらさきの曙を賞す

春の雨やちりあつまりて居中て

女倶して内裏おすんなるの月

葉ぶるもむ女やはを長ろうて

よのさゝんを宿をおの家や紙自

さゝめきを見てゆく程や臘月

野宴

草庵水の声ふる日の春

指南車を胡地より去る霜の

立春舟乃ちてゆく流れ

橋ふるて日ぞうんとなる春乃水
春小雨四条五條乃橋の下
足よハの竹うりて渡るなり
春乃水背戸ゝ田作ゝんとなる
春のゆゝしたゝ藤縄の磐たひ
蛙をあふ鶯のおもしや春の水
西の京さくらけぬ掛て
久しくあれ果る家
五ゝうりハをさゝふて

裏雨や人住て畑を隠る
加賀の袋ぬゝしに春乃あめ
春雨や為ゝる張中ゝうり
ゝゝ雨や小殿の小貝ぬるてかと
湖ゝ雨を蛙声や春の雨
ぬるハ生ふ池の水ゝや春乃雨
ゝゝ中ゝ

春雨やものの書ゝ丸ありける
春雨や暮あんとゝ乃ゝもゝ

長雨やものうく義と傘
清流の波さもやうて岳の雨
長雨やうとよの月の海よ
さるさめや網うち狩く小てうとて

ある頃王乃ものと

市屋く茶釜光さく楼の船
あちさものや槽屋つむにてすみ
夕マスリ
王人北はまれく沈さ

初年やそのあかく乃油たみ
大仏むかや名湖四堰の鮒の彩
初はやあ行くり日のある
蓋とふもしもあらそ茶のこ

ある人はもとく

命婦よのろく餅たそ俳名
ろあくに京ん見ゑ田に責
不作りさ津る北里や田螺あへ
静さく坊てしの尾たのの

[illegible]て鶯啼田にしの声を聞
丁行て明日も[illegible]おもはる
後の[illegible]田かとの月乃見やるあて
[illegible]

郊外

[illegible]名もしらぬ鳥の白き花
[illegible]貧しき土をめぐるく

芭蕉庵會

畑[illegible]やまうめやもなくちるめ
[illegible]を[illegible]の主所の蓮うゑ
畑[illegible]おもはる此境佳景

小[illegible]て

[illegible]乃中つあるの此[illegible]
[illegible]雅[illegible]春の[illegible]
[illegible]刈[illegible]雅の[illegible]
[illegible]へ[illegible]大工やさしの[illegible]
[illegible]の[illegible]てさしよてる
[illegible]起て雅[illegible]宝[illegible]

木の間の路て皃類ひ佳きゝ次小

琴心挑美人

妹ヶ垣根さみせん草乃花咲ぬ

白梅や比丘より劣る比丘尼寺

紅梅の落花燃らむ馬の糞

垣越てものゝちきる接木かな

裏門乃寺に逢着す蓬かな

畑うちや法三章乃札のもと

さし僧や草の我乃八平氏

きし啼や坂を下りの驛舎

西山遅日

山鳥乃尾をふむ春の入日哉

遅キ日や雉子の下りゐる橋の上

懐旧

遅き日のつもりて遠きむかしかな

春の海終日のたり〳〵哉

鳥つや鳥さへ啼ぬみつけて

耕や五石乃粟のあるし皃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

無為堂會

曙のむらさきの幕やあの風

秋そ多の[illegible]やあのうせ

片野さらに[illegible]や春の風

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九董の蛙合催しける

月さやて蛙なるる田面の[illegible]

[illegible]

苗代の[illegible]

日八日九を[illegible]

連[illegible]

猶鉦鐘首水[illegible]

○作者つまこまらの朝曙の雨やまくろ乃雲いろ
よもすがら青空のきあや秋後
古河の流もりの花種たち
志のすゝくの雨降ものも焼野の
かゝ人数長帯力はさゝあぬ雲
もゝ乃色なる東右曽紀の乃たゝめて
乃ぶんゝ引ひあ文乃ゝて
錦のゝ袋ちさゝもちゝ花

○作者なゝおるひあ作まら
春色ゝたゝすゝれて
山川の井ゝ流る　鉋屑
屑なる舟を上れゝまゝれゝ
曽松ゝ人のゝまゝゝ莖ゝ
ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ根ゝ
野ゝもゝ焼る地蔵ゝ志ゝ
作ゝ助ゝ乃ゝ所ゝ雪畠
作ゝ焼ゝ石移ゝ乃ゝ焼ゝ

近江八景のうち粟津の晴嵐
ながめて行く山里乃仮白し
岩ゝ腰掛我袖乃ぬれし身

上己

古雛やむかしの人乃袖ル仕
笑をゆる良口元れや雛に對
たゝもの乃ぬきをあるや雛の鼻
ゆ代やたゝ長さゝゝとた葛花
雛見世乃灯をゆくるや長の雨

雛ゆる都をつれや桃乃月
ゆ今ゆ寂て牛つなぐや桃も
南人を吼る犬あるも妙花
さらの東桃つ玉ゝ小家ゆ
京中ゆ流ゝさむ乃振ゆ着
几帳ゆの窓のありとゝろ
やぬゝめのまゝのてゝ流れゆの水

風入馬蹄軽

木の下ゝ蹄乃ゝをゆ散さゝ

年のくれの雪ハ花の桜哉

剛力ハ徒く見るなり山さくら

曉臺ハ伏れ臥ものなるべし

如花林寺あうて信義の桜人

暮ん年をまつ雪の山さくら

錢賀しく今やよし山ひめ

糸桜賛

岩暮て雨もる宿やいとさくら

奇屑の折ゆれて山ざくら

きもとも知りもあれ山桜

浅瀬ひと日用院桜乃さかり

みよし野ちりぬ山桜

旅人の鼻ぬく春ハ沖さくら

ぬるよりハ日ハ暮れて山ひめ

吉野山

花ぐもく桜ぐ迄ハ川

花ぐ暮て我家をさ野乃ぐ方

花ちるやあるもく春のうらみ

花の居給へるを伝へ聞き人
所古人の言のさまざまなる義共
高野をとりて
ふれ住て花て真田が謂の
西川さくらやまの花田流れ去
なら乃やま當服をけ乃花一本
日暮るまで花をみる
峠義へ海るくいりての花の暮
花の香や清水寺のもも山清

雨日花をみる
花士の義やあとの花衣
彼婦人後の世をしてなんそ
なる無でひさみて白拍子
花さまてもうねるいと方
なくさ人のあの所
やとりを訪て
形を縮し草履も見て彼義
居見給へ花のもとの

堂入たまへ　婦や花のゝ
ゆゝしの春八百屋乃花ゝのゝて

一片花も減却春

さめて拾ふ美人乃指や減却を
も乃幕角めを取く　女あ楽
やたと舟作ゝのゝ
作せのひて　ゝ作ゝ
をゝめのゝ
小冠者ゝて花乃ゝを拾ゝ

みちしあるる夜も更まて春の暮
誰ゝのひくゝ花をを作せれ
閑帳乃鶴たゝ長の夕
ゝゝ春のゝたれて長の日ゝたり
春の夕たゝまする香を作く
花もてゝ本乃寺ゝゝ
苗代や鞠ゝの作ゝゝ楽
甲冑なゝゝやゝゝれ梨の花
梨の花月ゝ書ゝゝ　女あを

人なき日かゝる時よ[illegible]
山もとに[illegible]菜踊青や[illegible]
[illegible]

春景

草の花や月に[illegible]日の西に
なのそよぎや[illegible]
菜の[illegible]

長崎

行燈て南蛮の[illegible]

[illegible]

春長

ゆく春や逝く人[illegible]
行春や[illegible]
浜辺の[illegible]
[illegible]

白波のゆ葉[illegible]

行春や白[illegible]
長[illegible]

行春や鳥啼き魚の目は泪

さる程に行く春の名ごりを

惜しみ給へる人もの哀れ

あるくつ音をもいれて

西行法師をかれの春

春惜しむ人あまた乃宗祇

裏之部

消息をめぐる中ゝ　夏衣
はるかにみやこ人のそなたをうらもとへ
大兵の太刀あるやうや　あるか
こゝろもとなく　武蔵守殿　不化二人

時分

夏衣　秋の人　白
たのもしき数のめゝの　袷
痩腰の色に微風あり　あるか

はるかの海なかを　夏衣
ちれるたゝなのもとより
みるさしめのつゝめたる
ぬれにけりをうらもとを
稽のうらとうはさあいせうあ
夏衣いやしくもたゝ　殘
鞘もるなかもやかとゝ
かゝゝ　武蔵守安時を　義遠
子　枢を　同家

[illegible]

[illegible]

大漁るうて

[illegible]

岩倉乃[illegible]女[illegible]

稲[illegible]乃[illegible]

[illegible]

みやこの[illegible]

[illegible]

[illegible]

草の[illegible]の車[illegible]

[illegible]

法翻[illegible]

間王乃[illegible]牡丹を吐んとす

[illegible]

地車乃[illegible]牡丹

[illegible]

[illegible]

山蟻のあくらさぶこ　白紙丹
廣庭の引くんや天乃一方々
集落乃主人在所和殿の
二見をもて居れ一紙々
発るもとあさんれさや井乾て
主侯々交らむ方の八鶉衣袖数
すて山伸々若利をいとる弘
和歌土の首々かけ々永鞠鞠る
閑居なるとも考無るとやいく

山人八人こうんこうハ鳥なのう
食次の底たく音やうんこを
見踏を家あるもよまれす閑居な
人乃人め笠蓋の表やんこうう
ぬ作しき姫の礼義やうんこと来
閑居なされ々の根も砂て居る
乃こてう一のもたく不可もふくはる
　　理記　貴盛
君の乃く万あ志のうう乃ちきを

[illegible]

[illegible]の音なし　杜若

[illegible]程遠く[illegible]別る

みしらぬや[illegible]里の[illegible]更[illegible]

船[illegible]て[illegible]り[illegible]の明

みしらぬや[illegible]の上[illegible]の[illegible]

[illegible]同じ[illegible]川[illegible]水

[illegible]や[illegible]ち[illegible]浪[illegible]

[illegible]夜や[illegible]間[illegible]鱗の泡

みしらぬや三[illegible]や[illegible]井川

[illegible]

みしらぬや[illegible]を眺[illegible]

[illegible]や浪[illegible]ち[illegible]乃　捨[illegible]

みしらぬや[illegible]白拍子

みしらぬや小[illegible]

京都の人を[illegible]の澤[illegible]

[illegible]一つ[illegible]て志賀の私

みしらぬや決[illegible]の[illegible]淀の窓

外の光しの六月いるも蓮の葉もかの
まてこれを多乃橋寒とかの
奈信上人の石仏のさまも
たるかのいとゝ
寒さてやあのうたる竜の
声のゝやもてゝあくる夢の雨
砂川や或い夢を原北堤
夢のなかをけ君とを雀 鶴乃
三井寺やヨハ午みやまる若葉

あらたに居をトたるに
初夏の慣まらぬ住居
地尼をもて奈良とゝのゝ
窓の灯の梢ゝのる若葉
不二ゝゝゝを孫ゝ
施頂の城たの
若葉も水白く麦黄ゝ
山ゝ居ゝ小舟漕ゆくゝ
鮎を載てゝ原茶碗の

故郷の月つくる筋てアハ業や
尼寺や 鐘や懸たる宵月紙
あら深し 袋次 故郷も花盛
故郷を出て内つ居る人の数ハ
ちちそうら三年桜の
水樓つ寂して
鶴や雲を踏てやとゝ
百井戸や 故つ長ふ魚の青信
六月や故の居ルゆく水あり

故郷てまつる 信の坐右
岩山ゆ
三月雨大地く乃うやの月
故の声も西の花の散ちつ
諸子比秋の信濃つ今生て来ハ
いと居たのあれ行かれ
故郷ていて翠微ていらむ赤の月
若竹や 孫女あり
笋の義 あの業用や をとゝ

美作や夕日の岩蔵とゆふ雲の
筍や堺の住仲う寺とふん
ゆふ雲や蕗を離れて花もあるふ
頃雲て墓の避けりやり寺
岩蔵の雅国う国を捨て
ふ国う音ふて雲を花もと
も蕗や蕗なるふさ村乃雲ふこう
病人のかるも色ゆう雲乃秋
蕗を居稲雲うもとれ蕗とて

物京のたもと絵葛まて
目おのりさちゆ出る
雲あさ京をけて稲雲ふ
物出や仕とに国乃雲国
大魯九堂ふと布川ふん
ふうてかさ遠仲竹
蓉や稲雲う仲乃水車
丹以の加仕とふ雲て
方にのやさ蕗て竹さくて雲仕

ありし翁をあるじの追福に
観桶をぬれて樹下に床なれ
観も生き詳侍らしもなきみかな
観ずれや我根に筆さやしなれ

兎足は周の正当ハ文月中の四日
なるを卯月の半ばにとりて
追善ハよるしハ成しやとちて

麦刈めぬきてはせ給ふの秋
かりそめに百合生けの谷の房

かの東皐子のおもむきを
花いばら故郷の路 似たるかな
路たえて香にせまり咲いばらかな
愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

洛東芭蕉庵落成日
耳目肺腸こゝに玉巻芭蕉庵
青梅に眉あつめたる美人哉
青うめをうてはかつ散る青葉かな
うはゝちりやむかひの女房こちを見る

多賀や小青嶋の脛をうた
たちたふらんけや古鍛

浪花の一女幸子訪れて

鯨解て苦心の音ずれ
立山やてふれたる美狭人

懐

雉の充くもをぶくるたち
少保く利蹴ばるまい新刈
志のうめやの森の迫江の森畠

採薬を調ふ高根の僧侶
屋の苔やけ行ふれ月もも
時ふるこの刈藤花さく春の雨
出のうたに害ふれ落ツ桜の花

宿華乃舊邸あるて
活必ふれ俳士を集めて
参山さ今遠しるみ
くさ苔をゆあつめて花もろ
さみれのうら柱や老う庵

明く富士をもまやさ霧雨
さみだれや大河を前に二軒
さびたれや仲の苑を捨てかる
小田原にて合羽買ふの皐月雨
さみだれ乃大井播たるとしさと
さびしや雨田毎乃圃ふあの家

青飯に仲にとゆて逢ふに
旧歳の気ふふの会て
小播ふふあつきあつやれ都子

庇ふよの碑ふふ見む　高木
雨ナ秋中のりもてりやなこてふ
行や蚤笠ゆ蚤震（ナヘフル）なつ碑ふ
行ふて行ふ　行し　ふ無ふ
みちのくれ吾ふ草庵を
たてふれて
葉ふれの松さうせと　仏ふて
離ふれたるゆをふ箱のて田植ふ
能植て為る田植乃　男ふ

袖のうら這ふかるる

一書生北用窓を乎て
学問ハ座うぬけるかるる
うるむ　やうに用ゐ学乃にて
柏井の住を尼宿やうせ貞
さもうを座て雨うふや切り
雪信ゝ蝿うち振り　祖の事

恵契
おと葉多くうの凡るを女うふ

閑の戸に小雛のうら青なる小野
蝦乃鼠も今歓の舞張り
蝶いとふかをたるて屋敷の事

春座会書出の題
誰住て樽座るて物川ト
志のめの物をのうれたる魚
花なり物何ことしいスてめト
座京乃巻自分る物川ト
物舟漕く小窮さを照対ト

五百日墨もやすめさてうふ
日を経て無ふる筆の墨出
夢を病毎不二の夢
兄弟原つゝやもて
陽久て日数を九十九、化粧
弓南判髪三本掛て
服する指も出み乃小印
石工の鑿次〻たる法ふ
茶会て音ふくなる法水

九山泉水ちさき器を写〻
たる貧をもとの茶花
仕度縣令の地て栄利を
もとめ出ちいたし庵を
浜中て曳てつる
鏡亀や青磯も玉ゆめ山法水
二人して むをを濁る法水
我宿て いふ川原さし水
草いさ れ人死屋を孔の立

雲うかやおの乃唐乃三十星
ゆうかや黄さ咲くゆとを乃う
夕白の花嚙む猫や仆ふさろ

律院を歌きて

乃石も三つ四つ七色ゆらき華ゆ
蓮の香や水をとるゆ若三す
吟売乃浴をする蓮乃
白蓮を切らんとおよ傍の石
江の骨の二もとさくや雨ゆ中

夜ゆの月ゆあるを乃
やをうたへ入まゐる
いとたくとして

羅ゆ遊る蓮乃ゆもい哉

夜日三句

雨乃ゆ笠ゆる國国乃ふみゆ
貧服の字敏も乃ゆ早ゆ
大粒な雨ハ祈乃寄特うな
知ゆる里人の夢や夜九月

壹丈乃中草ぶかき庭の月
めずらしく乃ぶ能ける西の空北を
向童の遊ぶる宿や冬乃月
風山京乃月ゆゑおもひ深き
雷つ小京ハ焼れて風の音
あさ光ハ雨つゝれて風をゆ
ゆるゝて
弓丸の芋の油さたらむ
細腔つ夕風さハる　尊

第お根つて
あま酒の比樹もちゆ　第抜ゐ
師佛つ壹佛へ芋ひと瓶酒
夏病を祈の あま酒遣る杖う岡
萬屋

半日乃閑を樓や せみ此多
大佛の あゝ宮掾をみ乃壹
師修ゆ行者乃ゑる年の刻
蟬帝ゆ修正坊のゆあゑ可

ケ香や行くとまるせみ衣
加賀や唖の姫ひとりなり
ケ香やワキをれ白きる袖たみ

雅宗公くおとたれ去られた
ものとて家の裏路おかつる
とくて笠うなりたる家ケ
野国のそれも信濃路ゝお夏ゝ
ものさびの国画ん笛ぬけ
後一峰草乃あるゝ乃家ケ

七日

後ものやきの風ゝ
きくと今ものの作る稚子
かな成乃西岸ゝ揚て
丈山のにうるたり多せみ
酒ものの乃ものの乃ものり
ものしさや都を望ゝ名乃川

昔国ゝ魂をまつる
河原や蓮ゝまゝく行くも

川原つゝ惜よ仏師の立居哉
涼すや蟬をたゝるもうねり哉
勝山にて
川狩やゝ樓上の人乃至て良
面影の月誰ゝや狩の脛白さ
自つゝ翁を共つゝ鹿網乃小橋
川狩やゝ海を来るゝ舟もし
雙林寺指北千自
山ゝもゝ葉もゝ一千上吉

白面やゝ門脇よりくゝたすく
ゝもゝや草葉をたゝむ蛍
施米 水粉
勝山あり僧ゝ俗ゝ施米
水乃粉のさゝのさゝ草の亀
ゝの粉やゝあるゝゝゝ傷ゝ北君
旅意
廿日路乃背伸つゝゝやゝ涼
揚州の俳もゝゝゝゝゝ

面白き為ハ去ル七月廿
七の夕四澤の石乃洞てよりの
飛瀑とふやうに富士の裾野小乱れ
日陰の瓦に掛るあたりは
居ながら舟に乗てゐる暑さ
極楽寺庵主者
星の日の刀さらゆる庵うち
宗證ら者大庄屋
者を招て居れ玉ふ事ハ
紹居て書ものを避る暑さ
花乃山さ今し探題
慶居士ハ〻の和文を作る人
世子や綱の俳諧ハ東大寺
とゝんゝ逆しの銀河三千尺
宮留
芝居やとりそなたいつ海
裸角て弥ら作のまゝ弥
作ものゝ祢宜ておもむ作弥

奥州の青山屋敷やなどらく
出水のかゝる時節 夏 秋
勝河乃乃とゝまる
田中とゝまる里て
水ゝとて秋風そよゝ吹き川

蕪村句集上巻終

蕪村句集巻之下　　几董著

秋部

秋ゝ
秋ゝ
秋ゝ
秋ゝ
秋ゝ
秋ゝ

る紙衣滅ぶんとすれあまるひ

七夕

梶の葉を朗詠集のたぐひ

ふるさとの露も白ぎくより

ぢと入やたるくるまの指ぐぬき

あちきなき物思乃袖の露

袖ばをふるとはれ行ぬ

十六日の夕かたの乃

ぐりあはぬ乃

大文字のあとの空もたなら

相阿弥の自画賛なる大文字

接待ぐさもなくて西へり

英一蝶ら画賛をして

四十八月ぐさ

ぐさの帰明て

庵乃さくひ合せて

ぐさの庵にて

いろ書やはよりてさくら

いせの書乃二頭ぢやいせのみ

いなつるや里の角りの音なを
稲妻のあるかなきかの音やうの露

春秋こゝ白をとゝ立て

日こゝつゆゝて風あるまでなり
花入の力者あやゝゝ角力を
茶碗や 伝ん の角力ちりに
頂戴ゝゝ角力を面あるこゝ
おもり柳の もとにて
柳散 ほろ の調 石 康 て

小稲の角ゝ むせ ゝ 小 稲ら
ほろ ゝ 稲や なのゝ むけ ゝ ら
山 暮て 蛍 ハ 黄昏 乃 ほ ハ
ゝ ゝ ゝ 草ふ ゝ ゝ
里 ゝ ハ さ ゝ も ゝ ハ し ゝ
永面 ハ 所 ハ ゝ ゝ ゝ
一 毒 ゝ ゝ ゝ ゝ
秋 ゝ ほ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

猶の雲ゆきてをみ原
白萩を春はうちとるちまり門
傾き潜る花ひとつ蕭然たる
さもさもしもつある花をお御堂

洞水法師

紅ゆかや一輪開きを閑のうち
新月や長の長の蓋をうち
秋の蘭香るを花を白
蘭夕孤の花一奇橋を往む

辨慶を詠

ひとひなりひとひ我が勝
去らぬやさら男の腕をぬる
ぬぬ武蔵をもり　弱こそ
ぬ義み

立春一重眉を私の蜂屋
白梅や秋の刺ひとつ屋
結金の中ゆ結ぶ
市人のあちこち原寒の中

為ゝ[illegible]や[illegible]川のせゝらぎたゝなは
為にしむや[illegible]三まの[illegible]と国ゝ路
[illegible]や[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]

昔の[illegible]の[illegible]

[illegible]

昔のせゝらぎみ[illegible]なる　相模
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]や　[illegible]の市の音
[illegible]や　[illegible]ゝ音[illegible]ゝ[illegible]

の様てもゆきもゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
八幡の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]二日　月
[illegible]ゝ追[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]

[illegible]一筋に月ゝ[illegible]　桂河
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]や[illegible]ん
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

蟲てう葉ゆきたたてる
小百姓 教をれ花とをりをり
思ひ付や 清水乃女う生写
日八御関屋の濃くえんかう
良秋とをくもなく
訪ふるくもかくれて
中〳〵とうあれいそ月をな
名月こそのこゝろ推るを新
角の間のひゆも遠る月之雲

月天心名所を町を廻り
志賀去墳一樹乃松を倚杖
月ヶ雲自松ゝ原ゝ
名月や海ゝ波のゝ
名月やゝ中ゝ北ゝ原ゝ海の
摩耶観月
振ゝ笠ゝ雨ゝ月
月ヶ雲あるゝ北ゝ嶺ゝ
仲丸の魂ゝ雲ゝ月

若月や夜い人住め峰の雲
山の端や海を離るる月もなし
危の月主ととなる草庵
ちぢの花ハ眉にしるしの月
雛もうの酔るや嵐岩
玉山のすたれ巻とうとるる
夏付をあを銀中ゑ立て
月ハ九九を七なのすう碎くるの玉
花ハ野ゑ山ゑ為るるかな此月

秋のいのうのむしとあひて
名月や神泉苑の魚魂合
探勝雁字
一行の雁や橋みて屋を知る
紙の衣ものすすとりたるひら
百中の屋とゆ鶏を捨て
雨乃原遠ゐ行くハ角てう
原をしし角も方ゑ結束
原傳てきとと此木来あれよう

某島の雲に秋八月廉なる
こゝ尽時てゆくすゑの庭の色
殘照を映ぜ
廣ふる山嶺明るく入日哉
ある山ちの藤ゆたかなる花
葉を波ゆ秋ぞ深くなる
ねゝらてゝ乃れを雪ふる
初日をとゝ
廉の琴小坊主ゝ角なるゝ

れあく明さゝ竹芝の琴
老懷
ちゝはゝのみさをを我の者
父母のおとゝのおもかを我のこれ
あもらむもゝ明し三ゝ我の暮
旅の花
我ゝゝ我をゝゝや我の首
門をとゝれを我も行人我のこれ
弓ゝ引ゝ竹ゝ我の暮

林　為に於ては其たり所の者

故人と別る

不易なりていさとらんとおもひ

永きさとの弱のかれあきの風

秋の風書もせずして成るなり

金屏の羅は誰かあるのを

秋風やて魚うける濱庇

古人移行をあふ

去来去秋年移りゆくを

悲しの月泉書ゆくかなる

腸の中へ歩はめりし桂なる

四十よみそて知んとを

めやもとれ

あるかなるほとの桂なる

人の世を庭をたるかなる

新年をかなる庭ぬるを菊の事

此方秋の者務賛

此方秋のたのまれ色のかなる

姓名ハ何　まう吳ハ葉山まるか
三輪の田〻ゝ[illegible]
山路や[illegible]
[illegible]
とて我〻門行をとゝめ
[illegible]
[illegible]
小菊て[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

題白川

黒谷の陰ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
三徑乃十おつ盡て[illegible]
[illegible]

沙魚釣の中舟漕ぐ急ぐ前
百日の鯉切るて　鮒の巨口　玉や　吐
動上し　鮒の巨口　玉や　吐
ひとり大雨降りくらせり
くらの田畷　芝麻　てをきろ
下葉雲　やたのもしたれ　あきの
日影　たのもしたれ　花の
ちるをとゝめあれ　原
水ぬれ　夢ぬれ　あめの　蓮　西元

小ぶ　ふる音　ぬれ　さを　ひさ
けさ　もと　くら　ろ　野　ぬ
山　の　極　の　花　ぬ　宿　原
竹　陳　所　ぬ　ぬ　ぬ
ら　鳴　よ　眠る　鴨　あ　所
鳴　立て　ぬ　天　ひ　な　畏
つ　の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　林
ら　の　ぬ　や　の　機　の　ぬ　ぬ
陸田　降て　志賀　の　夕　見　や　江　鮭

西迎寺にゆしや　額白
紙乃暮迄の地蔵に油さを
杉の竹やゆしを奈良の乃ゝ市
追剥さ出ゝ物ゝ紙の旅
形面やゆ紙の草を踏ゝ原
丸山氏ゝ墨ゆ天を更る
潜をとゆをゝれを
おのゝ乃乃眉より吼て狐の秋
甲賀流の志のゝの賭や岸は秋

杉上杉の形をるア　うち
ア乃杉やを面を主のゝ狐あり
我則ゝるゝて
會催ゝ原ゝ
小路りをちくゆるさゝ
きゝくゝゝゆをを杉る行の
主を近をちさちゝ住きゝ
ゝゝ我ゝ作て今ハゝ止ゝ
石をゝ孤ゆゝ乃ゝ孤ゝ

名残をしく立ち寄りて見れば
明けの花咲き乱れ貪る花の香
散るを我が身に存ぜ見れば
市人の問ふ言の葉
宿借りて二階に来る雨ふり
三井の山上より三上山を
眺めて苔むす鐘をくくれば
角のかなのいさ月もより牛乗
ら待やうらさめ花咲る藤の樹

散るを惜しむ葉ぐらに咲る芭蕉哉
斗文文乃八十の翁を
おとづくや紙屋
稲刈て風もひらは花の松
廣はた
水ぬて池のひつみや桜乃月
山茶花の木乃人を乃桜の月
泊る気て ひとの来ぬもりナ二歌
十月のそ宵八志ろ乳後九月

十三夜の月を賞する
我日の本に此風こしらう
唐人も思ふ心をてのちの月
日てりと伏水の小菓をらしの
山京の菊をてまうの名ふて
あらしの前に秋をとゝ
かの白玉もとめられた
さゝの雫にて頂戴いのちく
いてしらも投壺まいせん菓の光

菊をたゝ古笠を屋根に葺て
白菓の上に山の雪を笠の下
手燭して色失へる黄菓子
財百戸菓子問もてんてん
あきはの秋の露を菊畠
菓子ハ菊乃 奴 この方

高雄

西りの方紅葉もいてゝ色ある菓子
ひたち田てゝ紅葉をうつし俗名

谷水の書てさこるもみちは
よらてるる谷ひるるのみ紅葉
さりらぬ無今宵角人なの一うき

はしたてるうて

笛の音こゆもよの来ぬ原広の秋
雨とれし山所ら果やもとゝ
ゆ〳〵の高きうゑめ落し水
元人の高の舟〳〵下せ乱上川
新米の坂田八ほ〳〵もうみ河

蕎麦稲穂日あるる方あゆきり
山本

拾ひゆく兎二ツ
望陣ものこ所ものこ所もむ
欠〳〵て月もふるる紅葉
起て居り〳〵高ものこ所
紅葉を小冠者外ものこ小稲
もゝ稲穂の連ものこ脚
山なるの稲踏ゆる稲長

子蘭のちゝよりの帰やまぼろしの秋

新宮や酒肴を詩ゝふ漁者　樵者

秋ハものゝをかなしかりけり

行住庵ゝ晩霞ゝ

旅寓やゝと行ふて

九盃の椎ゝむしの音やむ

椎拾ふ猫の咲のうらあり

探梅

餉ゝうゝゝ屋やゝかゝ

俳ゝ蔵めゝ蕃へめゝ番椒

新ゝゝ心ゝさゝ椒ゝ

椒ゝゝよゝ新ゝ倉梨ゝけふ

にゝきゝゝゝ椒ゝ番椒

椎ゝ乃寺ゝふゝむいてゝゝ

九華ゝ新ゝあふ

茅ゝゝゝ弘ゝ響れゝ蛍の月

茶ハ代ゝゝ新霜ハあられめ

ゝゝさゝ其ゝあゝたゝむ

思ひやり秋酒の中の寒さ哉

摩侍山恵心の住入ける地獄

みまかられたまふて新発意

あはれ方まさる

九月の秋五臓のくい肩こり生を

いたがるを價めとれば暮の秋

りの秋やもとなきたる秋くく

故の師の方や暮の秋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みのゆきのねぶりたる初冬の
初しぐれ眉に烏帽子の雫とし
樹の根をしぐれ静まりぬ
時雨ふる養蚕の人のまどろみ
しぐるゝや鳳の口なる琴の上
古寺の安安と月の出の
しぐるゝや秋も尽の雲ゆく
冬ひとり青く焼る我
[illegible]

くゝ子尾の山ぬるて一枝の
冊子の紙ゆ紅葉の
十日まつり花葉青く焼る
やてさらくとおちつたる
おとれあいれ
姉ゝ磯ゝ山ゝを踏る
初冬や日和の
居眠りて京ふんなる
冬ゝの磯を
[illegible]

然るに京紙にて書写せられしより
勝手に惟る書写して見たれハ
定家卿の御うつしなりける
東山の樋口に住たまひし
たる一音法師なりとも

嵐雪とふきし川合の鴨哉
いさ世しらんちりかけの里
落るひと良ハ実るかとんの哉
おしらへやけん祇園や左衛

大兵乃ミつかし飯あへ茶閑
扇の滝を踏つゝ涼しさん哉
十紋

あさ顔も茶もだぶく夕暮
沢瀉おりも過てはやせ逃るを
いとなみける二郷かな

篝火乃夜阿弥陀仏
良風川や犬のとぶる塀の内
枇杷の花寄もすゞめ日ぐれたり

柴の戸や白も苔のおもうらの
花乃さかりや石ゐて路を乱
嵯峨もおなじ山あるとて石鹿花
ひさしさふりれて宝倍
ちるとて其の別無きおもて
年や山元ちんとなのめ
年や少年下ふらも所ふる
紙ひろやや雪中花のなる内
孤や鶯鶯ゐ面れたる紙

一条もとり移のもと花鳥と
ゆ唱ふるあるを我と
ゆ花ゆ鶯ゐの行て
羽織ゐて洞もさく鶯ゐ川ゐり
風ゐの窓ゐら月のゆ行る外
成ちとり山をあり山て花ひら
折ゐる戸ゐ山の折ゐ
山ゐ百姓ふらゐ矢取
里ゐて古江ゐ居ゐと乙なゐり

[illegible]
[illegible]
春里の庵を訪ふ
[illegible]
[illegible]
宗任の少納言を神垣月
[illegible]
相逢ふ所にて乃ちを
[illegible]

小春風吉原にもも合五ケ二のぶ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

老女の夫を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

〇 銀の座て人まもき火桶ゟ
炭団ほ火桶の穴より出し
讃岐がまたはらく紙やけ
るるにあるまゝ蚊の情の世
おくれば先れさるをや其
来ると立て流とて
巨椋もてうあくまで歌人の
腰あけの書あ次々き巨椋ゟ
此紙伊勢物かくと云海人

鐘の音笑ふと飛ゟ乃毛
花渚山の櫻花と咲し如く桜の花
　春夜樓舎
むさし野の小まち見る柿本人
大ときの雲まりおりきこえの人
小名や柿本のまてかる二株
子とと猿る義さくための柿本人
草枝て瓶の忘郷無なり
〇 瓶火の継く候へまをり柿尾花

鳥獸よりは石の大きなる柱なり

金剛寺芭蕉庵

我〻紀行に得〻逗留せし柱屋元

なるの屋〻いさらなる柱なり

蕭條として在る日乃入柱なり

大海なる病の復常とゝのる

夜服や病よの記なり

待人乃呂青丹よし奈良葉

第に黄〻面白〻なる葉なり

大きなの葉あり長さ

行き行て四田を見る葉を

猶葉を拾ひて残る稿なるべし

おし乃葉さへも脇伊の書〻ハ

屋根なるなれなれなる柱さ

おとのてのちなるなるあつめて

さるも我さいふ乃屋なる屋

りふ尊柱のもの成葉さく

西吹ける たまる葉ふる

鰹けの宿 あくと紙しろう
ヤけの我 泣きて居る 雨ぞ降
秋の月 人は去りてつくづくと
青ぶくれて 白く冷と 鰹しる
伊豚の面 世上の人と 白眼む 哉
鹿ふて 鰹なき世の 友とハむ
待ぶて 鰹喰ひて居る 所人を
立佳 英八 伊豆 ふて 信ふき
なのこと 先ふと 生ひて 出ひて

始めて 紀者 伊ふ 佐ふ まて
待 ぶて ふ ふ ふ れい
ふ ふ の 涙 ふ る や 取 乃 露
大 魚 ふ う 吾 庫 の 頃 稲 を
九 董 ふ ま ふ た 波 ふ 人 し
と ふ ふ ふ を ふ ふ し ふ た
風 ふ 鯛 ふ ふ や 釣 の 魚
ふ ふ ふ や ひ ふ ふ ふ ふ ふ る
ふ ふ ふ や 畠 の 少 石 月 ふ ふ る

こしかや何くにかある五月雨
風やさのぬきてきぬの風
木陰や清き小石を伝あてる
さらしやぬ岩く裂り水の声

晋子に同

播盆のみとりのや寺乃霧
書屋やぬ百ねて生る息さう
初雪やぬ消れそ又宮の霧
初雪乃屋をゆそ竹の月

題七夕詩

雪形やぬ雪を届く棟屋の下
雪の宵野ぬ野て居るよう
くつみやぬ踏らん家も雪の中
いさ雪見　容す（カタチヲウクリ）　必裏とんを
湯さけて庭の小猫を雪の人
雪白しかぞの氏人うてうて
雪形やぬ雪夢ぬさめるみ
酒ぬ下酒さ歌乃雪を縫

[illegible]室の秋色の物さび
[illegible]のようとやつるめ物さび
[illegible]和を飛るたへ猟
宿をもめく分影や雪のふしぎ
九華[illegible]辰華より海さ
雲百里舟中さ我月を負ま
故人鱸鱠余の毫を[illegible]を訪
[illegible]を知[illegible]山雲
[illegible]て在再とて晩翠の

代[illegible]をもて[illegible]
[illegible]
[illegible]梁乃月の流ふ

陶弘景賛

山中の相　雪中乃ちん乃
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿日や傀の衣も出しあまりひとり
去年を山へ捨し世はもとに残子の
我かやうの世のさ俤子心を花ぶ
さし出て召やく先く羽ありぬ
取やそて声にみちの御隠居あ

凱亭

皃見せや夜着をはなるゝ妹が許
かほみせや暇乞さ世乃風けふ
かの鶯乃気にうつし給けたる

吾子か信に首さて詠書か
嫌うは

皃見世やふとんをまくる東山
新右衛門蛇足を誘ふ冬至哉
書記典主故園に遊ぶ冬至哉
水仙や寒き都のこゝかしこ
水仙や美人かうべをいたむらし
水仙や鵙の草茎花咲ぬ
これきりや此ぬるのあさる　蕪邨

家あれて蕪を刈れし庵のあ
葱賞て桂木の庵を訪りの
ひとりぬし小さ桂風 古葉哉
易水なくねつの風なすくさらも
皿を鉢 義仏言乃さもさま

郊外

静なるこの仏木らやれの月
ねさらさら月さ庫をはるかう
あの句ハ夢を感セし

同二句

二打さ供養一朝ねさくさら
おのむら乃人へ猿しなまもち
弱さ三井を寺とやれ木立
所入て香ぐおるやれさら
峰ト来て我あれれや我ハ
一瓢のさんて商ものれ我たき
木れしの坊主のそ四さたき
少ものそれハ鶏鶏を我設

花と表太雪と見るあり波叩
雪白いと高く星もたち波

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

寒風八詠

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三月末より矢作の宿るあらはれ
玉川潭毋の猶をみたる所を
古代く草庵ゆゑてみそれ外
山水の域るなと域りて水のな

俳素堂

鉄鎖の刑くゆゑつひぞあり
うら魚々腰する市北谷を
こゝさけや帯刀者乃高所
諸侯帰朝自己の吟を彫

鐵貫よりふハ梅の枝を
穿まる風ぜし
さゝ梅や火の迸る 鐵より
きゝ梅をもゝ多寡や老う時

感 保

さ月や門たの寺の天高
き月や鍛山石乃あらは
寒月や形木の中乃竹之竿
をゝやゝ流徒の群議の色て

さきの世にたれか誰ぞと
問ひたまへるすゞしき声やさきの念仏
極楽の近づいたさきの念仏
京都御所の上の所まで来るうち
さきのりやいさまつまつ一つの梅

九董判白合

鶯の京の方々刀を鏘しうち
きりと立成居るうち菜嗜
菜喰陳の真主　箸取来

ものうり信人つ借る家庫ヶ谷
妻母子れ扇鳥もんぜ菜喰
客信の和扇入やさもう嗜
春沢やうおして
夫運もこよしいゆるもとう志
にさ木の三月なる雑魚扇
なるひの母ゆ松も極めるもの焦
ふひを乃嗜や仰走の極もう
陽極ゝ必ゆうさを古屋曽

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蕉翁句集下巻終

天保八年丁酉六月求版

浪華中村三史堂

心齋橋通本町北ヱ入

鹽屋彌七